

学説史ゼミ（1998.12～1999.2）

中内敏夫『教育学第一歩』（第Ⅱ部教育学説史）岩波書店（1988）

報告：森政淳子

これまで院ゼミで学習してきた『社会調査論』の序章、『癒しの女性史』、院生全員が翻訳に関わった『Toward New Masculinities（新しい男性像を求めて）』など一連の文献には共通して、近年までの社会科学発展の歴史的経過について古代のヨーロッパに遡って触れている。これらの知識はテキストの著者らには共通教養として認識され、詳細に述べられてはいない。しかし、それらが社会の諸現象を相対化するために不可欠な知識として認識されていることは明らかである。

学問の諸領域が現代に至るまで、どのような系譜をなして細分化、専門化されたかを理解することは、自分たちが専門とする学問領域の成り立ちを把握し、問題の所在を明らかにする上で重要だと考えた。さらに、近年のように学際化が進む中で、それぞれの学問の関係を明らかにすることは有益だと考えた。

中内敏夫『教育学第一歩』第Ⅱ部教育学説史は、これまでも不明な点をあたるテキストとして活用してきた。本書は教育学という学問の性質上、その系譜の中で人間に関わる様々な学問を包含し、莫大な資料に基づきながら、系統的に簡潔に整理されている。このことから、われわれの課題意識に沿うものと考え、本書を選択した。

学生は分担を細かく分けたが、ほんの数ページでも内容が豊富なため全体を理解するのは努力が必要だった。橋本教授が学部の授業の際に作成したレジュメが手に入ったことは、内容の理解に役立った。

ゼミは、諸科学が細分化されるより以前の源流である、古代ヨーロッパの時代にまで遡り開始された。テキストに基づいて、科学、あるいはそれを学ぶことの理論について、宗

教、社会制度、経済状況などの当時の時代背景を確認しながら進められた。さらにヨーロッパとは異なる文化圏として、日本を含むアジアについて比較検討した。

『自然法』の中に自然科学も社会科学も未分化のまま包含されていた時代があった。共同体の解体など社会の変革が進む過程でさまざまな課題が表出し、その課題達成にむけて、自然科学と社会科学との分化が促された。このうち社会科学は、人間の関係性から生じる諸問題を解明するために要求され、発展した。これらの過程を理解すると共に、ヨーロッパとは異なる日本の学問の系譜を社会制度の変化を背景に置きながら把握することができたことはこのゼミの収穫であった。こうした学問の成り立ちをふまえ、保健学という新しい分野の課題を再確認することが重要だと思われる。